

『シャンティ』通巻278号 2015年1月1日発行（147.10月の1日発行）  
1985年6月28日 第三種郵便物承認

# Shanti

シャンティ



278 2015年1月  
ふゆ

災害から  
なにを  
学んだか

特集



公益社団法人  
シャンティ国際ボランティア会



阪神・淡路大震災から20年。

シャンティが神戸で活動した2年半は、どうしたら被災者の側に立つことができるか試行錯誤の連続でした。そこでは多くの反省があり、学びがありました。

災害の現場から得られた教訓がその後の海外での緊急救援活動、そして東日本大震災での復興支援活動でどのように生かされているのか、現場の声を聞いてください。

また、海外ではミャンマーやラオスなどの新事業地での活動も本格化、教育が子どもの将来を開くことを念じて事業に取り組んでいます。

どうぞ本年もよろしくお願いいたします。

## Index

### ★ 定点観測・アジアから

カンボジア ラオス ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ  
アフガニスタン ミャンマー 岩手 気仙沼 山元

### 12 特集 災害からなにを学んだか

### 24 世界の絵本を読んでみよう

白い鳩 ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ

### 25 日本しゃんていな旅

光寿院

### 26 みんながハッとするような

### 新しい商品を作りたい

デザイナー FUJI TATE P

### 28 シャンティな人たち

萩原嘉信 霧原智美 株式会社袖文

### 30 スタッフの昼ごはん

ハッターン事務所(カンボジア)

### 32 道

おしらせ 編集後記





コミュニティ図書館、開館

カンボジア **Cambodia**

報告：江口秀樹（カンボジア事務所）

10月、コンポントム州ニーベック集合村にカンボジア最大規模のコミュニティ図書館が開館しました。ここでは子どもだけでなく、大人の教育機会を広げることを目指しています。過去の混乱から、村の多くの大人は教育を十分に受けられず、読み書きに困難を抱えています。子どもも教育機会を広げるには大人自身が教育の力を実感することも必要です。

本館の蔵書は1000冊を超え、民話絵本から小説、カンボジアの歴史の写真集など幅広いジャンルに渡ります。とりわけ、暮らしの向上に直結することから最も人気のある農業や保健の書籍については、文字の読めない人でも親しめるよう、写真やイラストで直感的に学べるものを揃えています。

この図書館は週5日終日開館し、子どもと大人と一緒に学ぶ「みんなの学び場」となっています。今後は、識字教室などの教育活動に加え文化やスポーツ活動にも力を入れ、住民の幸せと村の発展に貢献していきます。



読書推進のための図書館活動運営研修会

Laos ラオス

報告：山室仁子（ラオス事務所）

2014年9月末、ルアンパバーン県ヴィエンカム郡にて第1回目の図書館活動運営研修会を行いました。

シャンティの職員、県教育スポーツ局の職員、ルアンパバーン公共図書館職員が講師となり、図書館活動の方法、本の管理方法、国の教育政策と読書推進の関わりなどを、講義と実践で伝えました。

本の扱いに慣れていない教員にもわかりやすいように、例えば本の管理方法をより簡単な方法で教えました。また業務で忙しい教員の負担にならないような管理表作りにも工夫をしました。本の登録実習の時間を多めにとり、直接講師により多くの質問をできるようにしました。また、子どもたちの前で絵本の読み聞かせ（写真なども実践しました）。

教員が円滑に読書推進活動を行えるように、フォローアップのための移動図書館活動を引き続き行っていきます。少数民族の子どもたちが物語や本の文字に興味を持ち、読書のみならず公用語のラオス語習得にも役立つことが期待されます。





マララさんが「GPE」のサポーターに

**Afghanistan** アフガニスタン

報告：三宅隆史（アフガニスタン事務所）

ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユサフザイさんは、アフガニスタンの子どもたちにも大きな励みになっています。マララさんは、2014年6月から「教育のためのグローバル・パートナーシップ（以下、GPE）」という基礎教育普及のための援助機関のグローバル・サポーターです。

6月25日、EU主催でブリュッセルで開催された第2回会合に、マララさんが設立したマララ基金の支援によって、パキスタン、タンザニア、インドなどから若者の代表12人が参加し、学校に行けない子どもへの支援拡充を、大臣40人を含む800人の参加者に訴えました。その結果、増資会合で2015年から2018年までの4年間で285億ドルのGPEへの拠出金が誓約されました。

残念なことに、日本政府の2015年の拠出誓約額は、244万ドル（約2億4400万円）と、2013年実績額507万ドルから半額以下に減少しました。GPEの支援対象国は、現在60カ国を数え、アフガニスタンは2012年から3148万ドルの教育支援を受けています。



未来へ向けて

報告：ブリダラート・タマタサナディー=エツソ（BRC事務所）

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ **BRC**

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の協力で、コンピューターによる情報提供活動を開始しました。

難民キャンプの図書館9カ所に計18台のコンピューターを設置し、ミャンマー国内・国境沿いのニューズ、難民に関する情報を、カレン語・ビルマ語・英語で調べられるようにしました。インターネットに接続されていませんが、情報は毎月更新されています。従来は月刊の紙媒体が主でしたが、これにより「他キャンプに関する情報、より最新のキャンプ外のニューズ、そしてミャンマー国内の状況や和平に関する動向が確認できる」といった前向きな意見が聞こえてきます。

またコンピューターは利用者、特に学生にとって更なる教育機会も提供します。コンピューターを通じて教材を手に入れ、タイピングや資料作成など、将来必要となるであろうスキルを身につけることもできるのです。

利用者が自らの意思・知識で判断し、次への第一歩を踏み出せるよう、共に歩んでいきます。





## 健康だからこそ生きがい生まれる

Japan 岩手

報告：吉田晃子（岩手事務所）

「自分たち一人一人が健康になることで日本を笑顔の絶えない世界一幸せな国にしたい」という願いを市内全域に伝えていきたいと意欲的です。

この活動が健康になるための一歩になり、健康だからこそ生きがい生まれ、楽しい人生を送ることができるようにと陸前高田に足を運びます。今では「ここに来て活動すること自体が自分の癒しになっている」と話す佐藤医師。今日も参加者と共に歩きます。

「NPOスマイルヘルスプロジェクト」の佐藤誠也内科医（中央の男性）は、陸前高田市のモビリア仮設団地北集会所で月2回ウォーキング教室を開催しています。

佐藤医師は2012年4月から1年間移動図書館活動に毎月参加し、2013年4月からはモビリアを拠点に手軽にできるウォーキングで健康維持に役立ててもらおうと活動を開始しました。東京ドーム5個分のキャンプ場がそのまま仮設団地になっている環境から、参加者は四季を感じながら歩くことができます。



## 子どもたちに話す力が身につきました

報告：本丸愛子（ミャンマー事務所）

ミャンマー Myanmar

「子どもたちは以前自分から話すことを怖がっていたのですが、最近は授業中によく発言するようになりました」。そう嬉しそうに語るのは、「学校に行っていない子どもたちのためのライフスキル教育事業」の地域担当者、ウズナインウィン氏。貧困や労働などの理由で学校へ通えない子どもたちを対象に、衛生・保健教育やHIV/AIDS予防教育、災害時の対処法などを教える活動をしています。

教員は、村出身の大学生。この日の授業内容は「タバコの危険性について」です。身体にどんな影響があるかを子どもたち自身で考え、意見を発表します。授業の雰囲気は終始活気があり、教師が子どもたちの参加を上手に促している様子が見受けられました。時折、村の大人たちも授業を見学しにやって来ます。こうした教育が現実役に役立っていくためには、周囲の大人たちの理解も欠かせません。この活動が子どもたちの生きる力になり、未来が少しでも明るくなるようにと願っています。







## 賑やかなお祭り会場に加わって

Japan 山元

報告：古賀東彦（山元事務所）

10月18日、19日の2日間、南相馬市で開かれたイベント「いちばん星フェスタ in 南相馬」に移動図書館車とともに参加しました。昨年に続き、2回目の参加です。初日は、今もその多くが避難指示解除準備区域の指定を受ける、同市南部の小高区で開かれる小高復興文化祭とのジョイント。白と黄色の図書館車を見かけ、「おらはのところに次いつくるんだ？」など、声をかけてくださる方も。移動図書館の訪問先の仮設団地でお会いする方でした。

2日目は、原町区的一般社団法人「いちばん星南相馬プロジェクト」の敷地内に、物産販売のテントや音楽のステージにまじって、移動図書館車を設置しました。綿あめやトン汁を手にした子どもたちがやって来ては、マンガを読んで行ったり、鬼ごっこしようよとスタッフに誘いかけたり。賑やかなお祭り会場の中で貴重な休憩場所になっていました。

移動図書館、昨年は珍しい存在、今年 はみなさんとの距離が少し縮まった感じがありました。



## 「あつまれ、浜わらす！」塩づくり体験

報告：畠山友美子（気仙沼事務所）

気仙沼 Japan

「海の水から塩をつくってみよう！」9月27日、地元の人びとの指導で食塩づくりを体験する「めざせ、塩づくりマイスター」プログラムに地元小学生13人が参加して行われました。

震災で失われた子どもと海との関係を回復するための自然体験活動「あつまれ、浜わらす」。今年5回目のプログラムは学校では学べない海水からの塩づくりの方法と、なぜ地域で塩づくりが行われてきたのかについて達人（大沢地区自治会の人びと）に教えて頂きました。

沖合から海水200ℓを運んで、釜で12時間かけて炊かれた塩（写真）が口に入るまでを体験した子どもたちは、身近にある自然に人間が生かされていることに触れました。

薪割り、火おこし、米研ぎからのお米炊きにも挑戦。昼食は、達人が育てた新米のおにぎりと気仙沼のさんまに、出来たてホカホカの塩をつけて頂きました。

苦勞して塩を作ったことやチームで協力できたことが楽しかったと大好評でした。





# 災害から なにを 学んだか

自然災害はいつ起こるかわかりません。しかし過去の歴史をひもとくと、起こりうる災害をあるていど想定できます。

地域の地理的特徴や災害の周期性を知って対応することで被害を軽減できるというのが「災害サイクル図」の考え方はです。いつか来る次の災害への備えとして被害の経験から得た知見を平時にどう生かすかの重要性がわかります。



被災地での速やかな活動のためには初動調査と事前の調整が大事です。2013年11月、台風ハイエンがフィリピンにもたらした高潮被害の現場での緊急救援活動の経過を見ていきたいと思います。



## 発災

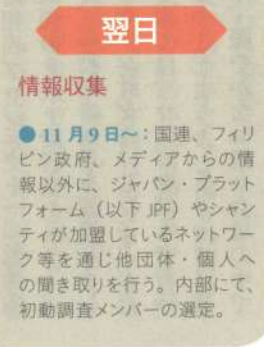
● 11月8日：超大型台風ハイエンがフィリピン中部を直撃



## 4日後

現地パートナー団体探し・初動調査事業申請

- 11月12日～：現地パートナー団体探し。現地のNGOを紹介してもらい、調査協力依頼と協働事業提案のためコンタクトを取る。交通手段・宿泊先などの手配。
- 11月20日：助成団体へ初動調査事業の申請、同日中に承認。



## 翌日

情報収集

- 11月9日～：国連、フィリピン政府、メディアからの情報以外に、ジャパン・プラットフォーム（以下JPF）やシャントゥティが加盟しているネットワーク等を通じて他団体・個人への聞き取りを行う。内部にて、初動調査メンバーの選定。



## 2週間後

現地入り・初動調査開始、並行して物資配布準備

- 11月22日～：職員が現地へ渡航。初動調査事業開始。
- 11月25日～：現地パートナー団体（西サマール開発財団、以下WESADEF）と被災地にて合流、調査。行政機関、他団体、被災者へのインタビューを実施。
- 11月28日～：WESADEF事務所にて、調査をした地域への物資配布の準備と調整、今後の事業形成について協議。
- 12月3日：助成団体へ緊急支援物資配布の申請。6日に承認。



## 4週間後

食糧・生活用品の配布・事業調整

- 12月5日～：被災地で食糧・生活用品の配布、及び今後の事業に関する調整を行政機関（町・村）と行う。
- 12月9日～翌年2月末：緊急支援物資配布事業として、家屋修理・再建に必要な工具及び材料を配布。



## 3カ月後

復興支援事業調査

- 2月中旬：復興支援事業のため調査へ。シャントゥティの専門分野である教育という視点から台風により被災したデイケアセンター（就学前教育施設）への支援、及びWESADEFの専門分野である虐待を受けた子どもやその家族へのケアを応用し、台風によりトラウマをもらった親子への支援を決定。



## 4カ月後

復興支援事業開始

- 3月1日～8月末：復興支援事業。WESADEFが実施主体となり、デイケアセンターの修理・再建とトラウマケアプログラムを実施。



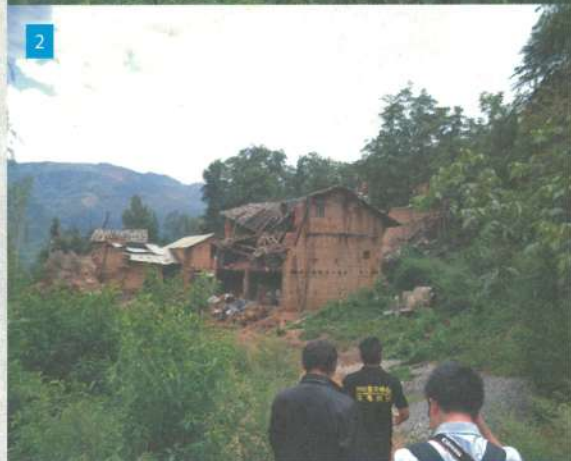
## 10カ月後

復興支援事業終了

復興期

緊急対応期





被害からの  
速やかな  
立ち直りのために  
現場で  
心がけていること

1. 中国雲南省地震（2014年8月）被災地の龍井村は標高2500mの高地。急斜面を切り開いた細い道を数時間かけて行かなくてはならないため、支援が手薄だった
2. 現地パートナー団体「NGO 備災センター（NGODPC）」の職員とともに村の被害状況を調査
3. 貧困地域のため、もろい構造の家が倒壊してしまっていた
4. 高地のため9月でもすでに肌寒いが、テントでの生活を余儀なくされる

Q 海外で、地元の人びとや団体と連携するメリットは？

A 海外の緊急救援事業でカギとなるのが現地パートナー団体です



長沢有華  
緊急救援室

災害現場で初めて会い、関係づくりと事業実施を同時に行うこと

は簡単なことではありません。現地パートナー団体（以下CP）にとって私たちはパートナーであり資金提供者、重要なことでも意見を率直に言ってもらえないことは多々あります。フィリピンでも中国でもCPの事務局長とは、お互いが納得いくまでとことん話し合いをしました。協働事業のことだけでなく、文化的なこと、職員のこと、個人の想い、非日常の現場だからこそ共有することが大事だと感じました。

事業のメインの一つとなる物資配布の前

に重要なのがニーズ調査です。ニーズ調査で決してやってはいけないことは、被災者のニーズを私たちが決めることです。同じ災害は一つもなく、一般論や常識にとらわれていては、被災地で本当に求められているものを見落とす可能性があります。そこで行政機関への聞き取り以上に私たちが大切にしているのは、被災者一人一人の声。インタビューする中で今現在不足して困っているものを的確に拾い上げ、その声にお応えすることを大事にしています。フィリピンや中国では、発災から数週間後に「食糧はあるが調理器具がない」というニーズが被災者から聞かれ、それは行政が見落とししていた点であり、私たちは「かゆいところに手が届く」物資を届けることができたと思っています。

被災地の現場で活動する際に頭に置いて

おくべきことは、担当者は日本の皆さまからいただいた温かいご寄付とお気持ちを直接被災者に届ける代表者だということです。そして、私たちが被災者の方からいただいた「ありがとう」や感謝の気持ちを日本でご支援下さった皆さまにお伝えすることも大事な役割です。そしてその言葉をつないでくれるのが、まさに現地パートナー団体の職員。彼らの支えなしでは何もできないと改めて感じます。

最後まで手を振って見送ってくれました（フィリピン）







### 私たちが得た教訓

阪神・淡路大震災救援活動の記録集『混沌からの出発』。神戸で得られた教訓を「10の視点」としてまとめています。

今号ではその観点から、現在の活動をとらえることを試みました。

### 【これだけは伝えたい10の視点】

1. 鍵を握るのは  
ボランティア・コーディネーターである
2. 救援物資を  
第2の災害にしてはならない
3. 被災者とボランティアには心の溝がある
4. 地域性を理解して行動する
5. ボランティア（救援者側）にも  
心のケアは必要である
6. 地元の人々や団体と連携する
7. 活動を始めの際には、  
撤退の時期を念頭に置く
8. 行政だけに頼らず、  
市民相互の協力の輪を
9. 想像力を働かせて行動しよう
10. 救援活動は  
自らの実情に即した方法で

（『混沌からの出発』100ページ）

る活動が増えました。最初は場をつくることでした。ある地区では、津波で流失したコミュニティセンターの再建を行う事に。設計の話し合い、材木の切り出しと製材作業、えんがわり作りなど地域の方と一緒に汗を流して2年。住民も建設に参加して再建しました。別の地区では、防災集団移転の話し合いに加えて頂き、合意形成を手伝いました。「まちづくり協議会」の立ち上げに参加した地区では、ワークショップで住民や子どもたちが、地域の将来を話し合う場づくりに協力して来しました。

一方、津波で失った子どもたちと海の関係を取り戻すための自然体験活動「あつまれ、浜わらすー」で、子どもたちを海へ連れて行くこと。また、震災をきっかけに協業を始め、グループで帆立貝やワカメの養殖を営む漁師と共に、漁村のにぎわいを図ること。そして、家族を津波で亡くされた方々が集う場「つむぎの会」の活動などもまちづくりのひとつだと考えます。支援のかたちは、地域や人の状況に応じて、現場で試行錯誤の末につくられるべきです。

大切なのは、地元住民と気持ちを共にすること。月日を経て初めて理解できる事があり、地元主体の姿勢が基本です。外から来た私たちがだからこそ気づく地元の良さもあります。一方、重要な場面では、住民に対して言いにくいことでも伝えられる関係性も大切です。地元どうして繋がらない場合も触媒役として、私たちが間に入る事でうまく繋がる時もあります。活動を通じて、支援をする側とされる側という関係を越えることが鍵だと思います。

3年を経て「まちづくりは『人づくり』で、『未来づくり』ですね」と、地元の職員が言います。ここでまちづくりが続いて行くために、活動日最後の1日まで、伴走して行きたいと思っています。

**A** 地元住民と気持ちを共にすること

**Q** 「想像力を働かせて行動する」とは？



白鳥孝太  
気仙沼事務所

「今、どんな活動が必要なのか？」と自問します。震災から3年半が過ぎましたが、先行きの見えない不安感があります。宮城県気仙沼市でも、全ての災害公営住宅の建設が完了し、高台への防災集団移転が落ち着くのは2、3年先になりそうな状況です。この中で、気仙

沼事務所ではまちづくりの支援をしています。震災直後、私たちの活動が始まった当初は、目の前にあることを手探りする毎日でした。災害ボランティアセンターの立ち上げ、避難所での炊きだしと生活必需品の提供、被災地外への入浴ツアーなど。その後、避難所から仮設住宅や地域へと活動場所は移行しました。2013年頃から、まちづくりにつなが



1-2. コミュニティセンター再建の話しあいや集団移転の勉強会など、住民が互いの意見を交換し合意形成する場をボランティアもお手伝い  
3. 小学生の長期休みの学習支援に首都圏の大学生ボランティアが取り組んだ「まなびーば」。子どもたちは大学生との交流も楽しみにしていた





# Q

東北の現場で、「地域のひとや団体と連携」している事例は？

# A

地域の公共図書館と共に活動しています



三木真冴  
岩手事務所

図書を通じた被災地支援を行っています。図書を通じた活動であることから、地域の公共図書館と連携することを意識し活動を行ってきました。岩手事務所が活動をする山田町・大槌町・大船渡市・陸前高田市の図書館はしばらく再開の目途が立ちませんでしたが、再開・仮復旧という形で現在は開館をしています。開館に至るまでの資料整理・登録のお手伝いや、公共図書館の移動図書館ではカバーできない仮設団地の巡回ステーションの分担など、情報共有・連携をしてきました。

外部から来た私たちにとって地域の公共図書館と共に活動できるといことは、利用される方々から信頼され、スムーズな活動の展開に繋がります。仮設団地の方への図書

の貸し出し、交流の場づくりに貢献できたと思います。連携はさらに発展し、共同のイベントも実施しました。

陸前高田市では市立図書館と岩手事務所が運営する陸前高田コミュニティ図書館、さらに2つの民間図書館が活動し、市内に4カ所の図書館が存在します。市内4カ所の図書館を市民の方により使ってもらうため、定期的に会合を開き情報共有・研修や勉強会を行っています。2014年の読書週間期間には4館の図書館を巡るスタンプラリーを企画し、市民の方に市内4館の図書館をアピールすることが出来ました。

また、公共図書館以外に支援団体との連携も意識して取り組んでいます。活動地にはそれぞれ支援団体ネットワークが存在し情報提供・共有を行っています。山田町のみ支援団体ネットワークが存在せず、それぞれの支援団体の動きが分からない状態だったので2013年4月に支援団体ネットワークの立ち上げを行いました。外部の支援団体だけでなく、社会福祉協議会、

山田町役場の担当部署も参画し会合を定期的に行っています。

ネットワーク会議では移動図書館で住民から聞いた声、生活に関する困りごとなどを共有しています。また、移動図書館の巡回先を広げる際に、今までに行ったことがない仮設団地の中からニーズがありそうな場所をアドバイスしてもらったこともあります。

今後岩手事務所の活動が終息していく中、地域の公共図書館や地元の方々と連携しながら撤退・引継ぎを検討していきたいと思えます。







1. 移動図書館車ドライバーの齋藤敏明さんが山元町の被災場所・復興場所をボランティアに案内する。齋藤さんは津波で自宅を被災した経験を持っている  
2. 東北の冬、日暮れ時間が早くなった  
3. 地域のイベントにも移動図書館車が参加させてもらっている（福島県南相馬市）

**Q** 「地域性を理解して活動する」ことについて現場で実感したことは？

**A** 目の前の相手と向きあうことを忘れないようにしたい



古賀東彦  
山元事務所

「東北人は「口が重い」といった県民性の類は、実際にその土地に行ってみれば、あてはまらない人がいくらでもいることにすぐ気づくはずですよ。たとえば東日本大震災発災後、ある町に関して、「ボランティアの受け入れが閉鎖的だ」というウワサを聞いたことがありました。とこ

ろが同じ町で、「避難所生活の間、全国から来た大勢のボランティアさんに助けてもらってありがたかった」という町民の方もいらつしやいました。町職員からは「避難所に避難している町民自らボランティアとして他の避難者を助けていた」という話もお聞きしました。土地鑑がないスタッフはウワサ話に振り回されがちです。「ここはこういう所だ」と簡単に決めつけないことが大切だと思います。

山元事務所が山元町で移動図書館活動を始めたのは、発災後1年半ほど過ぎてからですが、町のご理解も得られ、また、いずれの仮設団地でもあたたかく迎え入れてもらえました。

山元事務所は、山元町から車で1時間ほど行った福島県南相馬市の仮設団地にも、移動図書館車で訪問しています。南相馬市は、2006年に鹿島町、原町市、小高町が合併してできた市で、もともと市の市や町の個性がいまも色濃く残っています。市内の仮設団地は鹿島区（旧鹿島町）と原町区（旧原町市）にあり、小高区（旧小高町）から避難して来た方が大勢暮らしています。同じ市内とはいえ、鹿島区や原町区で避難生活を送る小高区の人たちの気持ち、小高区の人たちを迎え入れる鹿島区、原町区の人たちの気持ちを理解するためには、仮設団地のある鹿島区、原町区についてだけでなく、小高区についても知る必要があるわけです。これは外部の支援団体にとってはたやすいことではありません。

山元事務所では、山元町や南相馬市の出身者や、その土地で暮らしてきた人たちがスタッフを固めています。もちろん、その

土地の人ならだれでもいいということではありません。顔が広く、考え方も広い方が望ましい。そのような地元スタッフの情報網、人脈に頼りながら活動を進めることも珍しくありません。メディアからはうかがい知れない、町のつくりであるとか、人間関係であるとかを把握しない活動は、見当違いなものになったり、要らぬもめごとを起こしたりしかねません。ひとつの情報に頼りすぎることは避けなければならぬでしょうが、その土地で生きてきた人たちの言葉は多くのことを教えてくれます。

土地ごとに異なる、被害の様子についても知る必要があります。たとえば、福島県は、今回の震災で4つの被害を受けたといわれます。地震、津波、原発、そして風評の被害です。南相馬市の方も同じです。どの被害と関わるかは、暮らしていた地域によるものが多く、すべての被害に遭われた方もいます。どこから避難して来られたかによって、家が残っているのか、その場所に戻れるのかどうか異なります。求める支援の内容や期間も変わってきます。除染が進み、たとえ避難指示が解除されたとしても、原発が不安定な状態のままでは戻

りたくないと思える人もいて当然です。放射能の難を逃れて市外、県外で避難生活を送っている人もまだ大勢います。私たちは医療や科学調査を専門とする団体ではありません。南相馬市からの避難をうながすことも、安全性をアピールすることもできません。南相馬で暮らすと決めた方のそばで、声を聞き、共に考えることが大切だと考えています。

山元町でも南相馬市でも、行政が掲げる復興計画の中で、そこで暮らす方々がどのように将来に向き合おうとされているのか。健康、生活、放射能など、不安は人それぞれです。その中で私たちに何ができるのか。地元の方から「神戸のときは……と言われることがよくある。でも、そのまま東北にはあてはまらないから戸惑うこともあるね」といった声を聞くこともありましたが、もちろん阪神淡路の大震災を軽んじての発言ではありません。支援の知識や経験の大切さを否定する人はいないでしょう。ただ、相手を何かの枠にあてはめるようにするのはなく、常にいまいる場所から、そして目の前のお相手から何かを学ぶ姿勢を忘れてはならないと思います。





1



2



3

1.被災地の人たちの笑顔にこちらが元気づけられることも(2007年バングラデシュ・サイクロン被災者支援活動中の木村万里子)  
2.お互いの経験から学びあう(2014年東日本事務所合同合宿)  
3.2013年の水害で被害を受けた山口県萩市の災害ボランティアセンターをサポートする笠井スタッフ(左)

# 被災地から 「学ぶ」こと

木村万里子 緊急救援室長

1995年、後に「ボランティア元年」と言われた阪神・淡路大震災。シャンティでも全国からたくさんの方々がボランティアを受けました。以降、国内で大きな災害が発生することに、何か自分にできることはないかと全国からたくさんの方々が被災地に駆けつけ、災害ボランティアセンターに長蛇の列をなす姿が見られるようになりました。「困ったときはお互いさま」「苦しんでいる人たちを助けてあげたい」私たちの根底にあるそんな気持ちで、人々を被災地へと駆け立てるのかもしれない。

が元気をもらった」と語るのを耳にします。それは、「自分」支援をする人」が「被災者」大変な状況にあり支援が必要な人(匿名)へ働きかける、という一方だった両者の関係性が、ボランティア活動を通じて特定の個人対個人の対等かつ相互的な人間関係へと変化していく過程の中で、「学び」があったということの現れではないでしょうか。辛い日々を送り悲しみに沈んでいると想像していた被災者の人たちが、実際は助け合ってたくましく生きています。「泣いてばかりいても始まらない」と前を向いて歩いていて、そういう姿にこちらが感動し励まされる。お互いを思いやる気持ちの大切さ、地域のつながりが復興への鍵になること、人間のもつ生きる力……被災

災された方々と接するなかで私たちが忘れていた価値観や新たな気づきを得ることで私たち自身も変わっていく、まさに「共に生き、共に学ぶ」というシャンティの精神が被災地の現場にもあります。

過去に大きな災害に見舞われた人たちが、後に発生した別の災害に際して「今度は自分たちが受けた恩をかえす番だ」と支援活動に従事することがあります。経験者だからこそわかる被災者の痛みや必要とされる支援への理解を他の支援活動に活かすことは、被災地での「学び」の還元ともいえます。シャンティでも気仙沼事務所の地元スタッフである笠原が自らの被災体験や支援活動の経験を活かして2013年の山形・

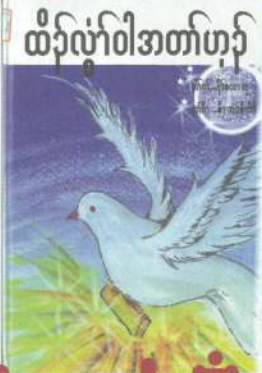
山口・京都で発生した水害での支援活動に従事しました。また、長期ボランティアとして気仙沼でまちづくり支援などに関わってくれた青島さんは、活動を通じて感じた「地域における平時からの顔の見える関係づくりの大切さ」を地元・浜松での防災活動に反映させるなど、被災地での学びや経験を次につなげる動きもあります。

こういった話を聞くとき、必ず思い出す映画があります。2000年にアメリカで公開された「ベイ・フォワード(原題:Bay Forward)」です。中学生の少年トレバーが、「もし自分の手で世界を変えたいと思ったら、何をやるか?」という社会科の課題に対して行った提案「ベイ・フォワード」。これは、

4.インドで開催された「防災における市民社会の役割」で東日本での活動を発表。他のアジア地域のNGOとも意見交換(2014年1月)  
5.メンバーでもある東京災害ボランティアネットワークで毎年行っている阪神淡路大震災の追悼と防災を考えるイベント「1.17灯りのつどい」

2015年は、阪神・淡路大震災から20年。3月には「国連防災世界会議」が仙台で開催されます。そこで出される新たな国際防災の枠組みに関して、日本からの提言作成にシャンティも参加しています。災害が頻発する日本のNGOとして、今後も被災地での学びを還元することにより、シャンティな世界の実現を目指したいと思えます。





# 白い鳩

世界の絵本を読んでみよう  
ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ  
(2009年)

1  
むかし、ナウポサワという娘がいました。毎日、おかあさんとけんめいに田んぼではたらいていましたが、食べものにごまるほどまずしい暮らしでした。



2  
でもナウポサワはやさしい子で、家にくる鳥やどうぶつにお米をあげていました。



3  
ある朝、白い鳩がとんできました。「なんでこんなに朝はやく来たの? お腹がすいたの?」「いつもごはんをありがと。ぼくは遠くへ行くので、今日はお礼をもってきたんだ」鳩はナウポサワに金のかたまりをわたして、さようならと飛びたちました。ナウポサワとおかあさんは幸せに暮らしました。

# 日本 しゃんてい な旅

8 宮城県仙台市

光寿院



①2年がかりの改修が終わった本堂 ②寺院が多い静かな住宅地の一角  
③境内は鉢植えや植木が多く落ち着いた雰囲気

### ●光寿院

宮城県仙台市若林区新寺3丁目

### ●周辺のみどころ

コボスタ宮城(徒歩10分) / 仙台城趾(仙台駅からバス10分) / せんだいメディアテーク(仙台市営地下鉄勾当台公園駅下車。徒歩6分)

### ●アクセス

JR仙台駅下車(徒歩15分またはタクシー5分)



杜の都仙台を襲った東日本大

震災で光寿院も大きな被害を受けました。大正時代に建てられた本堂は大きく揺れて柱や梁が損傷。建て替えずにはいけないのが危ぶまれましたが、なんとか改修したいという強い願いと建築家、職人の協力で改修されました。補強のために柱や梁に漆が塗られていますが、「ほこりを避けるために窓を閉め切った作業で、職人さんたちの尽力と熱意に頭が下がる思いでした」とのお話でした。大震災から4年近く経ちましたが、「沿岸部では生活の再建はこれ

から」とのこと。

伊達政宗が仙台北下を整備した際、福島県から現在地に移された光寿院。阿部豊淳住職は長くシャンティの理事、顧問を務められ、緊急救援活動、カンボジアの事業にもご協力いただいています。また、「国際ボランティアの寺」としてご支援いただいています。近所には楽天イーグルスの拠点であるコボスタ宮城があり、並木道の散歩を楽しめます。5月の新緑、秋の紅葉など四季折々に美しく、海の幸もおいしい街です。(広報課 清野陽子)





ビーズ制作の中心となった子どもたちに大事なポイントをレクチャー。みんな夕飯を食べる時間も惜んで制作に熱中していました。材料のビーズはトーホー株式会社の提供です。

「希望の家」の子どもたちが制作したのは、ヤシの実を削って作ったおばけネックレスと、ビーズでできたピアスとペンダント。



「希望の家」で一番小さい子どもは5歳です。まだ制作はできないので、一緒に遊んで交流。お姉さんたちが作るアクセサリーを必死で覗き込んでいたかわいい子どもたちです。

「継続」です。その他にも、山岳民族の伝統的な技術を用いたバッグやポーチ、カンボジアの織物「スン」を使

るビーズアクセサリーを制作するための講習会を行いました。ここは他の生産者とは違い、様々な民族の子どもたちが暮らす施設なので、伝統的な技術がありません。その環境をポジティブにとらえ、僕の技術を教えて、新しいものを生み出そうと考えました。彼らの作るものは、日本で流通することで施設の運営費になります。でもそれだけではなく、この経験を通して、将来仕事の選択肢が少しでも増える事を願っていました。その為に僕がしなければいけない事は「継続」です。

生懸命がんばります。ここからのクラフト・エイドに、ご期待ください

クラフト・エイドには、ボランティアデザイナーとして今年から参加しました。僕のように個人で活動しているデザイナーには、沢山のお金を寄付する事はできません。で

も、デザインを通して東南アジアの生産者を支援し、社会と繋がる事が出来るかと信じ、自ら志願しました。フェアトレードだけではなく、未来の自分にも向けた新しい取り

組みです。

さて、その最初の一步として、8月に生産地であるカンボジア、タイへ行きました。

様々な生産者を訪れましたが、その中でもチエンマイにある山岳民族の児童養護施設「希望の家」では、僕の得意とす

用した生活雑貨など、山のアイテムのデザインを行いました。

フェアトレードだから買うのでは無く、単純にアイテムを気に入ってもらい、買ったものにフェアトレードの物語がついてくるようなデザインを心がけて、ひとつひとつ作りました。自分の為にはもちろんですが、家族や友人へのプレゼントにも、生産者の背景を添えていかがでしょうか。皆さまの伝えていく力が、これからのクラフト・エイドを新しくします。その為にも僕は、伝えたいデザインを心がけて、一生懸命がんばります。ここからのクラフト・エ

はじめまして、デザイナーのフジタテペといます。東京を拠点に、刺繍で使う材料や技法を使って、アクセサリーやバッグなどのデザイン・制作をする仕事をしています。

今までクラフトエイドの商品はずっと私たちスタッフでデザインを考えてきたものが多く、「いつも同じようなものばかり」と言われてきましたが、今年若手デザイナーとして活躍するFUJI TATE P (フジタテペ) さんがボランティアでデザインをしたいと志願してきてくれました。この夏、共に生産者を巡り、素材を発見、デザインを作ってきました。のんびりしたタイやカンボジアの人たちも、FUJI TATE Pさんの熱意や勢いに押され、細かい要求に応えながらがんばって新商品を作っています。



上：孫の子守をするタイ・カレン族の女性  
下：タイ・リス族「重ね縫い」

みんながハツとするような新しい商品を作りたい

クラフトエイド  
craft aid



### FUJI TATE P (フジタテペ)

1981年生まれ。刺繍家。2010年より、刺繍の技法を用いた様々なプロダクトの制作を始動。ビーズアクセサリーブランド「PENTA」や、一枚の布から作られたバッグ「SMOCK」のクリエイティブディレクションをする他、オブジェの制作や空間デザインも行う。



# シャンティな 人たち

शान्ति



vol.  
**67**

株式会社紺文  
**萩原嘉信**  
**はぎわら・よしのぶ**  
代表取締役社長

**萩原智美**  
**はぎわら・さとみ**  
取締役

株式会社紺文はアフガニスタン支援に取り組んでいる老舗呉服屋。アフガニスタン事務所副所長ワヒドが来日した際に静岡にお伺いし、お話を聞かせていただきました。

株式会社紺文は1932年創業。染物屋だったが、先代から着物を取り扱うようになった。ベルシャ絨毯を取り扱い始めたのは約11年前。3年前からはギャツペ（イラン遊牧民の手織り絨毯）の販売も始めている。着物の柄や草木染などは、もとはイラムの国々からシルクロードを渡ってきて日本に伝わり、取り入れられたものも多いそうだ。着物のルーツをたどることで、ベルシャ絨毯にたどり着いた。現在、絨毯の売上の一部を寄付する取り組みを通してアフガニスタンでの活動を支援している。

を訪問したのは11年前で、これまでに合計3回渡航している。ベルシャ絨毯製作で、イラン人がやりたがらないような重労働を支えるアフガニスタン人難民。取引先のアフガニスタン人職員から支援の依頼があり、イランのアフガニスタン村（アフガニスタン人の集落）を訪れ、小中学生の子どもたち約60人へ学用品の支援も行った。そこで、本国アフガニスタンの方をもっと大変な状況だと聞かされた。シャンティとのつながりは、渡航後にシャンティの支援者から「絵本を届ける運動」を教えてもらい、子どもが小学生だったので学校の教員に相談し、小学6年生全員と絵本作りを一緒に行ったのがきっかけだ。そこで、アフガニスタンでは本が

足りていないことを子どもたちに伝えた。

2012年以降、アフガニスタンでの学校建設、子ども図書館活動、紙芝居出版など様々な活動を支援している。アフガニスタンの情報が一般の人に伝わっていない、現状を知ってほしい、少しでも意識してほしい、そんな思いから売上の一部を寄付するという仕組みによってお客さまにも現地のことを知ってもらえるようにしている。

「自分たちにも子どもがいる

が、同じ人間なのに日本の子どもたちとアフガニスタンの子どもたちの状況には大きな差がある。その差を埋められないにしても、少しでも協力ができないか。教育を受けた子どもたちが将来自立すればより良い社会になっていく。子どもの教育によって平和が訪れるのではないかと日本だけでなく世界が平和になってほしい」。そんな思いから支援を続けている。

(海外事業課 菅原里奈)



上：イランのアフガニスタン村での学用品配布  
下：「きもの紺文」店舗の外観



# シャンティからのお知らせ

## パキスタン難民支援活動をおこないました

タリバンが支配しているパキスタンのワジリスタン地区で、2014年半ば戦闘が始まっており、住民がアフガニスタンへ逃げ出していました。難民の数は28万人以上、戦闘は収束の気配が見えないまま、難民キャンプで平均気温2度という厳寒の冬を迎えることとなりました。

シャンティでは2014年11月にアフガニスタン事務所からスタッフを派遣して調査にあたらせ、最大規模のグラン難民キャンプで、支援を受けていない難民がいることを確認しました。難民の越冬に備え、12月下旬、その1000世帯に食糧、毛布、調理器具を配布しました。この活動はジャパン・ブラットフォームからの助成を受けておこないました。

アフガニスタン事務所長◎三宅隆史

## 人事のお知らせ

### ●入職

高橋純司(契約職員) 緊急救援室福島事業担当(11月1日付)

### ●退職

齊藤英雄(嘱託職員) 広報課課長補佐兼ファンドレイジング担当(11月30日付)

手束耕治(契約職員) カンボジア事務所アドバイザー(12月31日付)

### ●職務形態変更

金沢幸枝 山元事務所移動図書館運行リーダーまたはサポート(10月1日付)  
※契約職員からパート職員への変更

## 2015年「絵本を届ける運動」

2014年は1万5000冊のご協力をいただき、ありがとうございました。

今年にクメール語(カンボジア)、カレン語(ミャンマー(ビルマ)難民向け)の絵本の申し込みを1月から受け付けます。また、ラオス語、ダリ語・パシュトゥ語(アフガニスタン)、ビルマ語(ミャンマー及びミャンマー(ビルマ)難民向け)の絵本は、春から受け付ける予定にしています。今年の目標は合計1万6563冊と昨年より1563冊多くなっています。たくさんの方のご参加をお待ちしております。

「絵本を届ける運動」担当◎野口早苗、河口尚子

## 1.17灯りのつどい

阪神・淡路大震災を風化させないよう、毎年1月、地上広場に灯りをともしてメモリアルイベント(予約不要・入退場自由)をおこなっています。20年目の今年、パネルディスカッションが開催され、シャンティ職員が司会とパネラーとして登壇予定です。1月17日(土)午後、会場は国際フォーラム(東京都千代田区)。主催はシャンティも加入する東京災害ボランティアネットワーク。

## 編集後記

NHK連続テレビ小説から目が離せないこのごろです。9月から始まった「マッサン」は国際結婚がテーマ。シャンティは多文化共生の大切さを訴えています。現実に文化や価値観の違いを越えていくのは一筋縄ではいかないことがドラマに描かれています。それでも奮闘するエリーの姿を見ていると、前進することの大切さを感じて励まされます。(清野陽子)

シャンティ 2015年冬 278号 2015年1月1日発行

発行人 若林恭英  
発行所 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会  
〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階  
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220  
WEB: <http://www.sva.or.jp> E-Mail: [info@sva.or.jp](mailto:info@sva.or.jp)  
郵便振替 00150-9-61724

編集人 関尚士  
装丁・レイアウト 矢萩多聞  
印刷 株式会社大川印刷 [定価550円]

©2015. Shanti Volunteer Association. All Rights Reserved. Printed in Japan.  
●当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

これがワタシのチカラになる!



# スタッフの昼ごはん



住民参加による  
学校図書館運営  
事業担当  
パリックさん  
ロケットさん  
ツッペンさん  
ツキアさん  
事務所マネージャー  
ウィスナさん  
フーンさん  
ドリーム小学校事業、  
住民参加による  
学校図書館運営事業担当

ドリーム小学校事業  
担当 モンクラさん

パタンパンの難民さん、  
今日の昼ごはんは  
なんですか？

サムロー・プロハー  
きのこ野菜のスープ

サムロー・マジ  
魚・野菜とタマリンドの酸っぱいスープ

事務所で育てた瓜も  
入った豚肉と野菜・きのこの炒め

はっさくに似た果物

トライ・アング  
揚げた魚

カンボジア・パタンパン事務所のモンクラです。ドリーム小学校事業を担当しています。ここは、事務所近くの花や果物の木がいっぱいの「緑の食堂」です。7、10種類の料理が用意されていて、好きなものを選びます。豚肉と野菜の炒め物や酸っぱいスープ、魚の干物が定番です。事務所で育てた野菜を料理してもらうこともあって、皆で楽しんでいます。仕事上の情報交換をします。こうした時間を大切にしています。いつも温かいご支援ありがとうございます。ぜひカンボジアにお越しください。おいしいクメール料理をご紹介します!



គ្រូពេទ្យ!!  
チカニュー・ナツ  
(おいしいよ)



「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。



# 道



被災者を支えてきたのは  
国ではなく、人の力

理事 磯辺康子  
いそべやすこ  
(神戸新聞編集委員)

1995年1月17日、阪神・淡路大震災を境に価値観が変わった。自分の住む街で一瞬にして何千という命が奪われ、「明日は命がないかもしれない」と強く意識するようになった。自然の力と人間の無力を痛烈に感じた。

2011年の東日本大震災の後、多くの人が価値観の変化を口にするのを聞いたとき、どこか違和感があった。「ああ、この人たちは1995年には変わっていないかったんだ」と。「自分がこんな目に遭うとは思っていなかった」という言葉には、少々腹も立った。

しかし、「こんな目に遭うとは……」という言葉は、20年前、

まさに自分が発したものであった。災害に対して無知で、被災者の痛みに鈍感だった。世界有数の地震多発国なのに、自分の身に起こるといふ想像力を持ち合わせていなかった。

20年の復興過程を振り返って感じるのは、災害は命が助かった後も苦しいということだ。「後が苦しい」といつてもいい。住まいや仕事を失い、借金に追われる人が少なくない。将来が見えず、自殺する人もいる。コミュニティが破壊され、相次ぐ孤独死。どの問題も、東日本大震災で同じように起きている。

災害対策は、まず命を守ることが第一であるのはいうまでもない。ただ、この国は生き残った後に希望を感じられる政策があまりに乏しい。災害を生き延びた高齢者が「あのとき死んでいればよかった」という社会は

おかしくないだろうか。原発事故で全国に避難者が散り、暮らし再建の目途も立たない中で、再稼働の議論を急ぐことは、人の痛みに無頓着すぎないか。

国は被災者を助けてくれない。20年を経た率直な実感だ。たとえ何千、何万という死者が出ようとも、政府の視線はすぐに別の方へ向く。東日本大震災からそれほど月日が経たないのに、やれ経済だ、オリンピックだど騒いでいる現状を見ても明らかだろう。

被災地と被災者を支えてきたのは国ではなく、人の力だ。もちろん、そこには被災者自身が立ち上がる力も含まれる。人の力を信じられる経験が数多くあったからこそ、阪神・淡路大震災の被災者は希望を捨てずに生きてこられた。それは、どの被災地にも共通することだと思う。

被災地と被災者を支えてきたのは国ではなく、人の力だ。  
もちろん、そこには被災者自身が立ち上がる力も含まれる。